

説教 『望みは、鳥や花のごとく』山本 護 牧師
聖書 詩編 104:24~30/マタイによる福音書 6:25~34

聖地エルサレム周辺のユダ地方は乾燥した半砂漠地帯だが、イエスの故郷はその北方にある緑豊かなガリラヤ地方のナザレ。詩編や預言者のくっきりした裁きや恩寵とも、またひとあじ違うイエスの柔らかい譬えや比喻は、このガリラヤのたっぷりとした自然に涵養されたものなのかもしれない。

イエスはガリラヤ湖畔で四人の漁師を弟子にし(マタイ 4:18~22)、ガリラヤ中を巡りながら教え、病を癒し、福音を宣べ伝え、群衆が周囲に集まった(4:23~25)。騒然とした群衆の中では教えを語りない。イエスは数人の弟子を伴って山に登り、草の上で車座になった(5:1)。ここで長い「山上の説教」が語られる。マタイ福音書の5~7章を占める膨大な「説教」は、おそらく一度に説かれたものではない。各地を巡り歩き、折々に語られた断片が伝えられ、死後数十年を経て福音書としてまとめられた。

情景を思い描いてほしい。柔らかい草の上で車座になり弟子たちは教えを聞いている。眼下には漁師も多い豊穡なガリラヤ湖、山上には涼しい風が吹いている。イエスはガリラヤ訛りまるだしで語り、いたって素朴。弟子たちはこんなイエスに、すべてを投げ出しても従いたい何かを感じていた。

草に坐ったイエスは、「自分の命のことで何を食べようか何を飲もうかと、また自分の体のことで何を着ようかと思ひ悩むな(6:25)」と静かに語り始める。ほら「空の鳥をよく見なさい(6:26)」と飛ぶ鳥を指差し、「君たちはいっそう養われている」と告げた。ほら「野の花がどのように育つのか、注意して見なさい(6:28)」と足許の花を示し、「神は君たちをいっそう装ってくださる(6:30)」と語った。そして「思ひ悩むな(6:25,31,34)」と何べんも諭した。それほどに人は存在の底に思ひ悩みを抱えている。

イエスは自然との一体感を説いたのだろうか。それとも形式ばった世間の目など気にするな、と言うことか。それもあろうが、それだけではない。「御顔を隠されれば彼らは恐れ、息吹を取り上げられれば彼らは息絶え、元の塵に返る(詩編 104:29)」。「彼ら」とは被造物であり、私たちもその一員には違いない。「あなたは御自分の息を送って彼らを創造し、地の面を新たにされる(104:30)」。鳥や花、羊や草、そして悪人も善人も(マタイ 5:45)「神の息(霊、命)」によって瑞々しく新たにされる。イエスは草に座し、鳥や花を示して、弟子たちに一步踏み出すよう求めた。それでは何に対して踏み出すのか。

「空の鳥と野の花」の譬えの直前にある戒めに注目しよう。「だれも、二人の主人に仕えることはできない~あなたがたは、神と富とに仕えることはできない(6:24)」。多寡の違いがあるにせよ、人間の思ひ悩みは、「富」や世間的な「願望」に由来している。思ひ悩む者は、神ではなく、世間の願望に仕えている。「彼らはすべて、あなたに望みをおき、ときに応じて食べ物をくださるのを待っている(詩編 104:27)」。よく見(マタイ 6:26)、注意して見れば(6:28)、鳥の労苦や花の試練に気づく。するとどうだろう。それでも鳥や花が「神に望みをおいている(詩編 104:27)」姿を知って、私たちの心は震える。

「何よりもまず、神の国と神の義を求めなさい。そうすれば、これらのものはみな加えて与えられる(マタイ 6:33)」。主人は神お一人。神の前で無になると、鳥の囀りや花の輝きのような喜びが溢れ出る。



【おまけのひとこと】

意識で呼吸を止めることができ 息(霊)の拒絶も選ぶ 反対に 過呼吸はその名のごとく
吸い過ぎる袋小路 はじまりは吐く息から 御前で無となって霊を迎え入れる 無自覚なままに